
十日町市教育委員会 **文 化 財 課 年 報 5**

平成12年度（2000.4～2001.3）

十日町市教育委員会 文化財課

目 次

I. 運 営	
1. 文化財保護行政この1年	1
2. 文化財保護審議会の経過	2
3. 予算と決算	3
II. 指定文化財	
1. 新指定の文化財	4
2. 指定文化財の保存と管理	6
III. 埋蔵文化財	
1. 発掘・試掘調査の概要	8
2. 埋蔵文化財等調査報告書刊行事業	10
IV. 調査・研究	
1. 調査報告 佛像調査報告Ⅱ	西川新次 11
*新収蔵資料から	13
2. 資料紹介 伯父ヶ窪地内採集の石剣	菅沼 亘 14
V. その他	
1. 笹山遺跡出土品国宝指定1周年記念事業	16
2. 文化財資料の活用	18
資 料	
附. 文化財資料データー	20
附. 指定文化財一覧	22
編集ノートー職員名簿	24



《例 言》

1. 本書は、十口町市教育委員会文化財課の平成12年度を中心とした活動記録である。
2. 本書の構成は、文化財課の業務を大まかにⅠ. 運営、Ⅱ. 指定文化財、Ⅲ. 埋蔵文化財、Ⅳ. 調査・研究、Ⅴ. その他の5つに分類し、活動を報告する形とした。
3. 本書の原稿は文化財課の職員がそれぞれ担当を決めて執筆し、末尾に担当者の名前を記した。なお、Ⅳ. 調査・研究については紀要的性格に鑑みて記名原稿とした。
4. 佛像調査報告Ⅱは、平成7年度に故西川新次慶應義塾大学名誉教授（当時）に依頼して行なわれた調査の報告書を掲載した。なお、同氏による同調査Ⅰは、平成2年に行なわれており、報告書は文化財課年報2（平成9年度）に掲載されている。
5. 提出された原稿は、できるかぎり原文を尊重した。ただし、内容・表記等については、執筆者の了解を得て編集者が修正したものもある。
6. 本書の編集は竹内俊道が担当し、文化財関連データー等で石原正敏の協力を得た。

I. 運 営

1. 文化財保護行政この1年

始めに平成12年度の文化財課の活動を概観する。詳しくは本書の各項目をご覧ください。

《文化財保護審議会》

今年度委員の改選が行なわれ、竹内道雄氏（14期28年）、上村政基氏（8期16年）が今限りで退任された。両氏はともに高い見識を有し、文化財保護活動に尽力され、後進にとって良き先達であった。長年にわたるご指導に深く感謝申し上げたい。

第15期委員には5名を再委嘱し、庭野政義氏、武田正史氏が新た就任した。新会長には樋熊清治氏、会長職務代理者に佐野良吉氏が選出された。任期は、平成14年6月11日までの2年間である。

《文化財指定》

教育委員会は、平成13年2月15日に牧脇観音堂の木造聖観音立像1軀、宮本茂十郎手織の透綾（絹縮）裂地3点の2件を市指定文化財にすることを文化財保護審議会に諮問した。文化財保護審議会は、2月27日に審議会を開き、市指定文化財とすることが妥当である旨の答申をした。これを受けて、3月22日の教育委員会で市の文化財として指定することを決定し、同日に告示された。

《指定文化財の管理等》

県指定文化財「神宮寺観音堂・山門」は、平成8年度から県費補助を受けて茅屋根の葺替えを行なっているが、5年目にあたる今年度は観音堂西側を実施した。また、鉢の石仏の保存修理も実施した。

《発掘・試掘調査》

太子堂地内の道下南遺跡、魚之田川地内の道端A・B遺跡の3件の本調査のほか、西本町地内の馬場上遺跡、塚原町地内の上塚原A遺跡の2件の確認調査及び下条道城巻地内、中条池谷・三ツ山地内、六箇麻畑地内の4件の試掘調査を行なった。別に刊行する『道下南遺跡発掘調査概要報告書』、『道端A・B遺跡発掘調査概要報告書』、『平成12年度十日町市内遺跡試掘・確認調査概要報告書』も併せてご参照いただきたい。

《出土遺物の整理》

本格的発掘調査報告書刊行と今年度発掘した遺跡の概要報告書作成に向けた整理を進めてきた。

《国宝館・火焰の都計画策定委員会答申》

国宝の保存と活用を図るため、平成11年9月19日に市長から諮問を受けて以来、11人の委員による委員会及び分科会等を15ヶ月にわたり開催し、慎重に

審議してきた。その結果、国宝を活かしたまちづくり建設が早期に実現されるよう意見を付して、平成12年12月14日に委員長の小林達雄氏（國學院大学教授、新潟県立歴史博物館長）から市長へ『国宝館・火焰の都計画』が答申された。事務局は文化財課の職員が兼務する博物館が担当した。

答申の主な内容は、史跡・笹山遺跡を中心にしてその周辺に縄文の森を育成し、湿地の復元、縄文公園の整備などの環境整備を行うとともに、中核施設としての国宝館を整備するというものである。火焰型土器を生みだした縄文時代の自然と共生した生活について理解を深めることとし、自然生態系との調和を図ることを基本理念にしている。

《課題と展望》

今年度、十日町広域圏で繰り広げられた大地の芸術祭・アートトリエンナーレは、様々な論議を呼んでいるが、文化財保護の面でも一石を投じた。当市でも指定史跡鉢の石仏地内に、現代アート作品の設置要望が出されたからである。文化財保護審議会では、文化財保護の立場から主催者や地元設置推進者と話し合い、作品の材質を自然素材とすることや仮設的施工とすること、設置期間を限定することなどを条件に現状変更を認めた経緯がある。

こうした事例は、今後増加していくことが予想され、文化財審議会や文化財保護行政に課題を突きつけた形となっている。

一方で、平成7年「フィリピン・コルディラの棚田」が世界遺産に登録され、平成11年「姨捨（田毎の月）」が国の名勝指定になるなどの、文化的景観を重視する考え方が導入されて、従来とは違った新たな種類の遺産・文化財に光があたる方向が示されても来ている。文化的景観の考え方にはそれ自体が顕著な価値を有するものと、他の史跡名勝天然記念物や有形文化財の周辺に展開しそれと一体になって価値を形成するものとの2種類がある。先の棚田の例は前者であるが、今後は後者のような別の中核的文化財の緩衝地帯としての性格をもつ「いまひとつの文化的景観」の保存と自然環境保護も視野に入れて行かなければならない時期にさしかかっているのではないだろうか。文化財保護や活用の重要性和難しさを再認識している次第である。

ともあれ、この1年間の各種事業を実施するにあたり、ご指導・ご協力をたまわった関係各位に心から感謝申し上げたい。（山田正毅）

2. 文化財保護審議会の経過

平成12年度6月11日を以て第14期の委員任期が満了し、12日付で第15期委員7名が委嘱された。

◆第1回 6月27日（火）午後3時00分～5時00分

《出席者》樋熊清治、佐野良吉、須藤重夫、田村喜一、大島伊一、庭野政義、武田正史の各委員。事務局：生越教育長、山田、阿部、高橋、竹内。

《内容》

最初に、委員の互選で会長に樋熊清治氏を、職務代理者に佐野良吉氏を選任。樋熊新会長から就任の挨拶があった。会議は、4月からの事務局体制や職員の紹介の後、今年度の指定候補物件について、事情聴取と審議が行なわれた。結果、牧脇観音堂の本尊と宮本茂十郎手織の裂地を候補とすることに決定。続く報告事項では、発掘調査予定と笹山遺跡出土No.1土器の発掘状況モニユメントの設置、梅原猛氏の講演会や国宝館・火焰の都計画策定の進捗状況について、担当より報告説明が行なわれた。

◆第2回 9月26日（火）午前8時～18時30分

《出席者》樋熊会長、佐野職務代理、須藤、田村、大島、庭野、武田各委員。事務局：山田、阿部、高橋、竹内、菅沼、太田。

《内容》

博物館協議会委員と合同での視察研修。

長野県立歴史館と「縄文のビーナス」の国宝指定を機に再建された尖石縄文考古館を視察した。

前者では、文書や遺物の保存処理も担当している県立歴史館として役割について説明を受けた後、収蔵庫や作業室を中心に見学。地道な活動の大切さに理解を深めた。後者では、国宝指定とその後の取り組みの説明を聞いた後、施設内容や来館者等への対応、事業展開等に委員はじめ参加者から質問が出され、活発な意見交換が行なわれた。また、国宝土偶が全国各地の代表的土偶のレプリカとともに一室を与えられ、落ち着いた照明の下にシンプルな構成で展示されていた点は印象深く、参加者の注目が集まっていた。

◆第3回 12月4日（月）午後1時30分～3時30分

《出席者》樋熊会長、佐野職務代理、須藤、田村、大島、庭野、武田の各委員。事務局：生越教育長、山田、阿部、高橋、竹内。

《内容》

始めに本年度指定候補物件2件の実見を行ない、続いて物件内容と指定名称等について、次回回答に向けての審議を行なった。次に平成13年度文化財課の方針・重点と主な事業について事務局より説明が行なわれ了承された。

報告では指定文化財の保存・管理・活用状況、文化財関連博物館行事、海外展国宝貸出、国宝館・火焰の都計画策定進捗状況等がなされた。委員から鉢の石仏に設置された現代アートを例に、文化財保護法・条例に違法行為に対しての罰則規定がない点についての問題提起がなされた。文化財審議会として文化財を守る強い姿勢が必要との意見や、文化財保護の考え方に筋を通すことが文化財審議会の役割として望まれるのではないかと意見が出された。

◆第4回 2月27日（火）午後1時30分～3時30分

《出席者》樋熊会長、佐野職務代理、須藤、田村、大島、庭野、武田の各委員。事務局：生越教育長、山田、阿部、高橋、竹内。

《内容》

指定候補物件、彫刻・聖観音立像1躯、工芸品・宮本茂十郎手織の透綾（絹縮）裂地3点の2件について審議。全員一致で指定に同意。答申書を教育委員会（教育長）に提出した。その後、新年度の事業と予算について等の報告がなされ了承された。各委員から国宝保存のため貸出しを禁止するなどの措置が必要との意見が出された。

△文化財保護研修会（中魚沼郡・十日町市社会教育振興会主催） 10月20日（金）午後1時～6時

委員6名、事務局7名が参加した。（高橋アキ）



視察研修 於：尖石縄文考古館

3. 予算と決算

平成12年度予算の特記事項は、下条地区における県営ほ場整備事業関係の発掘調査が前年度ではほぼ終了したことにより、発掘調査関係経費のボリュームが減少し、遺物整理及び報告書刊行事業関係経費の占める割合が高くなってきていることである。年度当初予算は30,928千円であったが、6月、9月、12月、3月の補正予算を経て、決算は20,751千円となる見込みである。

内容は、大別すると(1)一般経費、(2)文化財保護調査費、(3)埋蔵文化財関係経費からなる。

(1)は文化財保護審議会の開催、文化財課所有の車の維持管理など経常的な経費であり、ほぼ前年度並

みの実績額となった。

(2)では、例年同様の指定文化財管理委託料・補助金のほか、今年度は6年継続の5年目にあたる神宮寺観音堂西側の茅屋根修理、鉢の石仏修復及び環境整備工事などに補助を行った。

(3)では、今年度も遺跡の試掘・確認調査事業に国庫及び県費の補助を受けたが、開発事業の実施が延期されたことなどにより、事業費は計画の4割にとどまった。また、継続事業の馬場上遺跡ほか古代遺跡の発掘調査報告書作成を行う一方で、中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査が始められたことや、土木費予算で市道高山太子堂線工事に伴う発掘調査が行われた点に特徴がある。(岩田恵美子)

○歳入予算（決算見込）

(単位：千円) ※ 3月22日現在

13款 国庫支出金	2 項 国庫補助金	5 目 教育費国庫補助金		
節	説	明	予算額	決算見込額
4. 社会教育費補助金	25. 遺跡調査遺物整理補助金		6 0 0	6 0 0
14款 県支出金	2 項 県補助金	7 目 教育費県補助金		
3. 社会教育費県補助金	20. 遺跡調査遺物整理補助金		3 0 0	3 0 0
19款 諸収入	4 項 受託事業収入	2 目 教育事業受託収入		
1. 遺跡調査業務受託収入	10. 中山間地域総合整備事業遺跡発掘調査受託収入		9,5 0 0	9,5 0 0

※他に、労働費予算で緊急地域雇用特別交付金事業補助金3,000千円がある。

○歳出予算（決算見込）

(単位：千円、千円未満切り上げ) ※ 3月22日現在

節	説	明	予算額	決算見込額
1. 報酬	文化財保護審議会委員報酬		1 8 5	1 4 9
7. 賃金	臨時職員賃金2,238・発掘調査人夫賃金4,482・調査補助員賃金648 遺物整理人夫賃金1,487・文化財保護人夫賃金ほか184		9,0 3 9	8,8 6 0
8. 報償費	指導者謝礼ほか		5 5 4	1 6 8
9. 旅費	費用弁償50・普通旅費56		1 0 6	1 0 2
11. 需用費	消耗品費926・燃料費33・食糧費3・印刷製本費2,728・修繕料150		3,8 4 0	3,7 4 3
12. 役務費	手数料35・保険料37		7 2	6 2
13. 委託料	地形測量1,544・指定文化財管理522・遺物整理作業3,000		5,0 6 6	5,0 6 6
14. 使用料ほか	コピー使用料250・発掘用重機借上料721		9 7 1	9 5 8
15. 工事請負費	指定文化財説明板設置工事		3 8 0	2 7 7
18. 備品購入費	文化財資料150・参考図書備品10		1 6 0	1 6 0
19. 負担金ほか	指定文化財保存修理事業費補助金		1,1 2 0	1,0 6 7
22. 補償料ほか	笹山遺跡指定補償料		1 2 5	1 2 5
27. 公課費	自動車重量税		1 4	1 4
合 計			2 1,6 3 2	2 0,7 5 1

※他に、土木費予算で埋蔵文化財発掘調査事業（高山太子堂線）13,030千円がある。

Ⅱ．文化財指定

1. 新指定の文化財

平成12年度には、新たに下記の有形文化財2件を市の指定文化財として指定した。

これにより、市内の指定文化財件数は合計43件となった。(巻末指定文化財一覧表参照)

(1)木像 聖観音立像 1 軀

市内水沢新宮(牧新田)にある、牧脇観音堂で本尊として祀られる仏像。平成7年の第2回仏像調査で故西川新次慶應義塾大学名誉教授により調査され、16世紀後半頃の仏像との報告がなされている。

《種別》 有形文化財 彫刻

《所有者・管理者》 龍王山講中 代表 村山賢一郎

《文化財の現状》

牧脇観音堂の厨子内に安置されている。保存状態は良好である。本像の胎内には1寸3分ほどの仏像(金銅仏?)が納められていると伝えられている。また、本像は元来白木の仏像であったが、昭和の初めの長期御開帳の折に修理がなされ、表面に塗りが施された。

《像の概要》

像高 髪際高 台座全高(単位:cm)

87.5 76.5 22.0

木造。古色(ベンガラ漆彩)。白毫水晶製(嵌入)。玉眼。

左手に未開の蓮華を捧げ、右手は屈臂して掌を半ば内に向け、第一、第二指を捻じて花を開くさまを表わす通行の印相を採るが、上半身は肉身を現わさず、偏衫の上に偏袒右肩の大衣をまとい立つ。その構造は、頭部は耳前で前後に矧ぎ、差首とし、体部は背面襟側で背部を矧付け、これに袖を含む体側部を矧付け、両臂前の前膊部(袖を含む)、両手首、両足先を別矧ぎとし、内刳りが施されていると推定される。

このような着衣の聖観音立像は、わが国では鎌倉時代に入宋僧によって採用されて以来、まま各地に造立されている。

すこし顎の張った平滑な面に配された細く見開く目や、やや厚い上唇をもつ面貌表現は端正で、総体に形式に則りながら、破綻なくまとめられていて作

風は堅実である。製作年代は縁起がまとめられた元亀3年(1572)から大きく遡るとはいい難く中世後半頃の製作と考えられる。

《文化財の由来》

縁起によれば、本尊は弘法大師の作と伝えられ、文治年間(1185~1189)に美作国より戦乱の世を逃れようとした夫婦が、像を背負い諸国巡礼の途中、新保村の村山家で亡くなった。村山家では像を大切に信仰し、後に各地から応援を得て、延徳元年(1479)龍王島に一堂を建立した。しかし、明応3年(1493)夏の長雨で信濃川辺にあった全村が水に流され、像も失われてしまった。しかし、ある夜川辺の光を見て、泥中の像を発見し、改めて現在位置に堂宇を再建したと伝えられている。

《その他参考となるべき事項》

本像は村山本家で代々護持してきたが、時代の趨勢により現在は村山マキを中心とした龍王山講中と新宮地区で保護・管理している。

例祭は7月16・17日で、17日午前10時から2時間御開帳をする。その際土市の観泉院様を招き大般若会を修行する。

昔は33年に1度(33日間)しか御開帳はなかった。この長期御開帳は昭和4~5年頃に開催したのが最後だったという。

その当時の例祭は、境内の馬場を鈴をつけた馬が練り歩く賑やかなものであったが、昭和10年頃からその姿を消してしまった。

(2)宮本茂十郎手織の透綾(絹縮)裂地 3点

透綾(絹縮)の製法と高機を十日町に伝授し、十日町絹織物産地の祖とされる宮本茂十郎の手織の裂地。現存する宮本茂十郎の唯一の遺品でその資料的価値は高い。

《種別》 有形文化財 工芸品

《所有者・管理者》

所有者 十日町織物工業協同組合

管理者 十日町市博物館

《文化財の現状》

本資料は平成6年8月18日付で所有者から十日町市博物館に寄託され、現在同館の常設展示室で展

示公開されている。保存状態はおおむね良好である。

《文化財の概要》

本裂地は、十日町榎町（現宮下町西）の樋口佐七家（屋号金登屋）の織物裂地見本帳である『雛形帳』に貼付されている。『雛形帳』縦14.5cm、横19cmほどの横判の帳面で、表紙に「明治四年雛形帳」、裏表紙に「十日町 金登屋」と書かれている。綴り紙数は71丁でほとんど織物の裂地見本が貼られ、一部には裂地の分解図なども描かれている。

茂十郎手織の透綾（絹縮）裂地はこの30丁目の表を空白にして前葉との連続を断ち、同裏の左端に樋口佐七の筆で「明治廿年樋口八十八殿ヨリ飯塚茂重郎殿ノ切本ヲ賜ル」と記され、次の31丁目の表に横長の裂地が2点、裏に方形のやや大きな裂地見本が1点貼られている。そして、この表の右端下には、同じく佐七の筆で「元祖飯塚茂重郎殿、十日町ニテ織初メノ見本ニテ、切ハ樋口八十八殿ヨリ賜ル」・「貳枚」、裏の右端には「飯塚茂重郎君前同断」・「壺枚」と書き込まれている。これら3点の裂地はともに子持縞で、2ないし3ヵ所に「樋口」の割印が認められる。

《文化財の由来》

茂十郎は別に飯塚茂重（十）郎といい、京都西陣出身の織物技術者で、渡り職人として桐生などで絹織物の指導をしていたが、文政の末頃越後に移り、五泉や加茂などを経て、文政12年(1829)、十日町の縮商人松屋庄兵衛に伴われて十日町へやって来たという。

十日町では、高機の製法を伝授し、経に絹糸、緯に苧紐を用いたいわゆる絹縮を織出したと伝えられている。このことが、十日町が越後縮産地から絹織物産地へと転換するきっかけとなったとされる。大正12年（1923）には、織物産地十日町発展の功労者として宮本公園が造成され、顕彰碑が建立された。

この裂地の貼付された裂地見本帳は、佐七（石翁）の孫樋口平治郎が昭和3年に、当時の十日町織物同業組合に寄贈したもので、以後十日町織物工業協同組合が所蔵・保管してきた。

先に述べたように、平成6年に十日町織物工業協同組合から十日町市博物館に寄託され、同博物館の常設展示室で十日町織物の大切な資料として公開されている。

《その他参考となるべき事項》

(1) 樋口佐七家（屋号・金登屋）

十日町でも最も古い織物業者。佐七（石翁）の長男常太郎は、明治28年(1895)十日町へ初めてジャガード機を導入し、風通織などの紋織物を開発した産地の功労者。

(2) 樋口八十八

縮問屋丸屋・樋口平治郎の分家。呉服屋という屋号で、本家と共に宮本茂十郎の織った製品を一手に販売していたと伝えられる。明治19年の戸籍簿によると、八十八家と佐七家は隣家であり、血縁はないが親しい間柄であったと推定される。

(3) 宮本茂十郎

十日町産地の功労者といわれながら、出身地や素性・経歴、その晩年など判然としないことが多い。松屋庄兵衛家に寄寓した後、原村や宮下など住居を転々と替えているが、その間に庄兵衛の娘をはじめ、波間照、山内すま、田村きん、南雲ヨイの5人に透綾（絹縮）の技法を教えたといわれている。茂十郎は数年後十日町を去ったまま消息を絶っている。

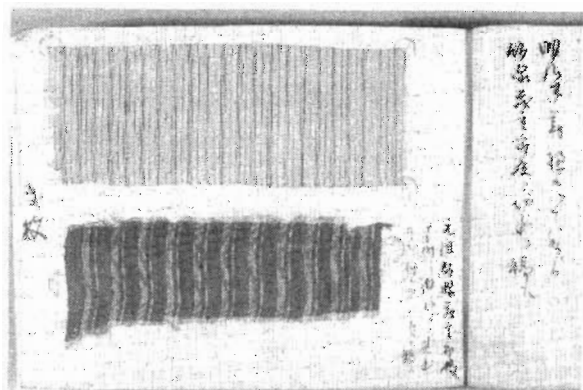
なお、茂十郎が飯塚姓を名乗ったのは、神明町の縮商人・飯塚家に寄留していたからだという。また、宮本姓は、顕彰碑建立時に、茂十郎の住居が宮下町にあったので宮本と名付けたが、それ以前はただ「茂十」と呼んでいたという大島与助の証言がある。
(竹内俊道)



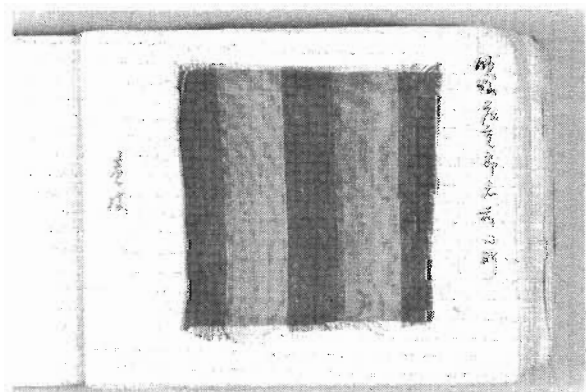
聖観音立像正面



同 上半身



宮本茂十郎手織の透綾（絹縮）裂地 2点
(明治4年「金登屋・雛形帳」31丁表に貼付)



宮本茂十郎手織の透綾（絹縮）裂地 1点
(明治4年「金登屋・雛形帳」31丁表に貼付)

2. 指定文化財の保存と管理

■指定文化財標柱設置事業

文化財に指定された物件について、その存在を明確にし、広くその存在を知らせる意味で、屋外の指定物件（建造物、史跡、名勝、天然記念物など）を対象に文化財標柱を設置している。

標柱は木柱のため数年で朽ちてしまうので立替えが必要となる。12年度には腐蝕が著しい「大黒沢正平在銘梵字碑」の標柱を立替えた。

費用 37,800円 施工 田順アート

■指定文化財説明板設置事業

標柱と同様、屋外の指定物件に順次設置している。指定文化財に近接して設置し、文化財の概要などを記して見学者の便をはかるとともに、文化財の保護意識を育むことを目的としている。12年度には「入山のカスミザクラ」の説明板を設置した。

費用 276,150円 施工 丸山工務所

■文化財保存管理委託・補助事業

市教委では、指定した文化財の保存・管理等のため、所有者・管理者に対し管理委託と補助を定額で行なっている。管理委託の対象となる文化財は、清掃・雪囲い・除雪などが必要な屋外の物件であり、補助の対象は、無形民俗文化財のうち伝承にかかる内容のみである。内訳は巻末資料参照(23頁)。

■文化財保存修理事業

(1)県指定の建造物「神宮寺観音堂・山門」茅屋根葺替工事が、平成8年度から6年計画で行なわれている。5年次にあたる12年度は観音堂西側屋根の葺替工事を実施した。市は総額の1/4を事業主体者に補助している。

工事名 神宮寺観音堂茅屋根西側葺替工事
工事期間 平成12年7月1日～8月12日
事業主体者 神宮寺
工事担当者 茅葺職人
斎木春治、大津秀夫、大津正美
岡田一彦

工事費 3,200,000円
(内訳) 新潟県 1,600,000円
十日町市 800,000円
神宮寺 800,000円

(2)鉢石仏の十三仏の内、倒れる危険があった三体について修復を行なうとともに、数カ所の石塔についても転落を未然に防ぐ措置を講じた。市は総額の1/2を補助している。

工事名	鉢石仏修復および環境整備工事		
工事期間	平成12年11月11日～11月30日		
事業主体者	鉢石仏保存会		
工事担当者	池田石材興業		
工事費	294,000円		
内訳)	十日町市	147,000円	
	石仏保存会	147,000円	

■その他

(1)カモシカの食害

9月初め、六箇地区の山間地田圃でカモシカの食害発生したとの連絡が入ったため、県教委文化行政課職員の来訪を仰ぎ現地調査をおこない、結果を文化庁に報告した。平成9年に続いて2度目であり、今後も被害が予想されるため、今後はなんらかの対応が必要となる。

(2)銃砲刀剣類等登録取り扱い

12年度の登録取扱いはなし。

(3)郡市社会教育振興会文化財部会研修会開催

文審委員や担当職員を対象に、十日町市、川西町、津南町、中里村で、毎年持ち回り開催している同研修会が、10月20日四日町やまだ屋を会場に行なわれた。今年は十日町市の当番であった。

研修会に先立ち、博物館で開催中の特別展「縄文の祭祀」を見学。次いで大地の芸術祭の作品展示で問題となった「鉢の石仏」、茅屋根修理後の「神宮寺」、国宝出土地「笹山遺跡」を視察した。

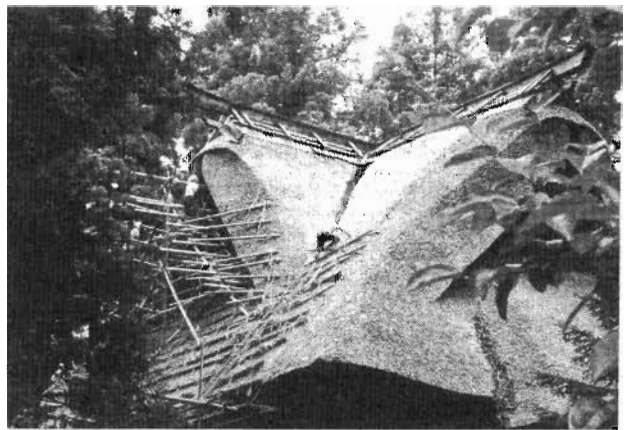
会場では各市町村が当面している文化財の保護の問題点についての意見交換を行なった。特に共通の話題として、大地の芸術祭の現代アート作品設置と文化財保護の關係に各市町村の委員・担当者の関心が集中した。

参加者28名(懇親会25名)

(竹内俊道)



神宮寺観音堂茅屋根修理 一挿し起こし作業一



同 一刈り込み作業一



カモシカ食害調査



鉢の石仏に設置された作品

Ⅲ. 埋蔵文化財

1. 発掘・試掘調査の概要

平成12年度の十日町市における発掘調査の内訳は、本調査3件、確認調査2件、試掘調査4件である。これらの調査原因は、県営中山間地域総合整備事業、県営ほ場整備事業、市道改良舗装事業、水田改良(個人)、宅地造成、土砂採取となっている。

以下にその概要をまとめるが、それぞれの詳細については概要報告書(本調査)、市内遺跡試掘・確認調査報告書を参照願いたい。

本 調 査

①道端A遺跡(中条・魚之田川地内) 本遺跡は、国道252号・三坂トンネルの北西に位置し、南北を沢に挟まれた台地斜面上に立地する。標高は、232～243mである。遺跡は、県営中山間地域総合整備事業中条高原地区・魚之田川工区に伴い、5月中旬～8月中旬までに1,536㎡の範囲が調査され、縄文時代早期と近世の遺跡が発見されている。

遺構には、建物跡1棟、土坑2基、杭列などがある。建物跡は、一辺が約3.5mの正方形を呈する。遺物は、縄文土器、近世～近代の陶磁器類、銭貨などがある。縄文土器は点数がわずかであるが、早期の表裏縄文土器であり、市内で初めての出土である。陶磁器類は、18世紀後半の肥前産磁器の碗や皿が主体を占める。銭貨は、寛永通宝の一文銭で15枚出土している。

本遺跡は、中条から魚之田川、三坂峠を越えて堀之内に抜ける田川入り街道(戦国期～近世)の道沿いに位置する。残されている古文書によれば、魚之田川には元禄2年(1689)に藩役人の通行や御用状を継ぎ立てるための御用継所が設置され、元禄5年

(1692)には家が5軒あり62人、安永元年(1772)には家が10軒あり143人が住んでいたと言われている。今回の調査により、魚之田川に存在した近世村落の一端が明らかにされた。

②道下南遺跡(中条・太子堂地内) 本遺跡は、市立中条中学校の南方約400m、国道117号の西側に位置し、信濃川右岸の河岸段丘(根深面)上に立地する。標高は130m、信濃川の現河床との比高は約20mである。遺跡は、市道高山太子堂線道路改良舗装事業に伴い、4月下旬～9月中旬までに2,000㎡の範囲が調査され、縄文時代早～中期と中世・近世の遺跡が発見されている。

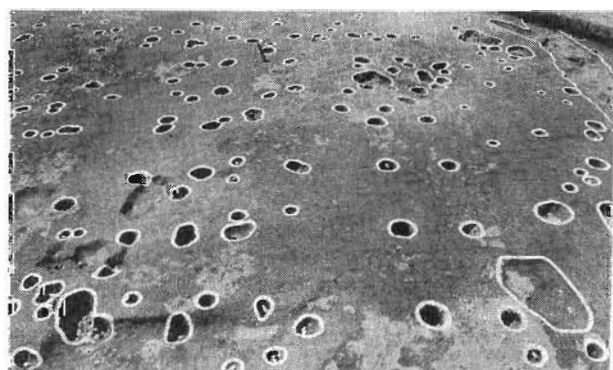
遺構は中世のものと思われ、掘立柱建物跡5棟、溝跡4本、柱穴などがある。建物跡の中でも第1号建物跡は、両側に庇をもち、6間×4間(10.6m×6.4m)と大型である。溝跡は、建物跡を方形に囲むものと推定される。

遺物には、縄文土器、石鏃、打製石斧、磨石類、中世～近世の陶磁器類、銭貨、砥石、硯などがある。縄文土器は、中期後半のものが主体を占め、前期の諸磯b・c式がわずかに伴う。中世の遺物は、青磁、珠洲焼、土師質土器、銭貨などが出土している。銭貨は、「元豊通宝」(初铸1078年・宋時代)、「洪武通宝」(1368年初铸造・明時代)である。近世の陶磁器類は、18世紀後半の肥前産磁器の碗や皿などが出土している。

遺跡の所在する太子堂地内には、永禄・天正期(1588～1591)～天保4年(1647)の「太子堂村検地帳4点」(平成11年度市指定文化財)が存在する。今回の調査により、太子堂村の起源が中世までさかのぼることが明らかとなった。



道端A遺跡の近世陶磁器類

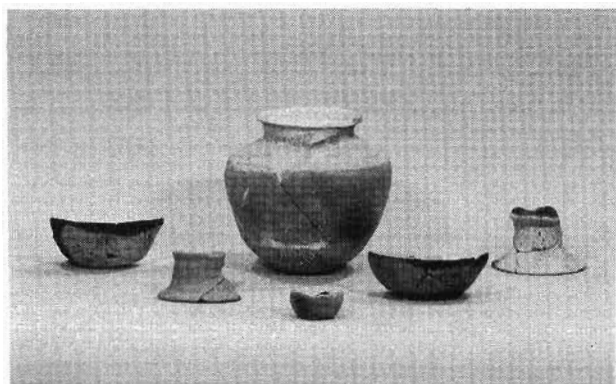


道下南遺跡の第1号建物跡

確認調査

①馬場上遺跡（西本町1丁目地内） 本遺跡は、市立西小学校敷地内に位置する。信濃川右岸の河岸段丘（根深面）上に立地し、標高は135mである。遺跡は、以前に西小学校および市道の建設に伴い調査が行われ、古墳時代中・後期、奈良・平安時代の集落跡が発見されている（1974・75年：第1～4次調査、1980・84年：第5・6次調査）。

今回は水田改良（個人）に伴い、4月下旬～5月中旬に224㎡の範囲が調査され、古墳～平安時代の土師器・須恵器などが出土している。中でも古墳時代の土師器が主体を占める。



馬場上遺跡の土師器と須恵器

②上塚原A遺跡（塚原町地内） 本遺跡は、市立南中学校の西方約250mに位置し、信濃川右岸の河岸段丘（根深面）上に立地する。標高は、145mである。以前より、縄文時代中～後期の土器、打製石斧、石錘などが採集されている。なお、これらの中には、深鉢形土器1個体も含まれる。今回は宅地造成に伴い、5月下旬～6月中旬に80㎡の範囲が調査された。調査前より塚状の盛り上がりが存在していたが、当該期の遺物はなく、塚でないことが確認された。遺物は、縄文時代中期の土器、石鏃、打製石斧、磨石類、石皿などが出土している。遺構には、時期不明の土坑がある。



上塚原A遺跡の調査風景

試掘調査

県営ほ場整備事業に伴い下条・道城巻地区、県営中山間地域総合整備事業中条高原地区に伴い中条・池谷地区、三ッ山地区、土砂採取に伴い麻畑地内の麻畑原C遺跡において、計4件の試掘調査が実施されている。これらは、10月下旬～11月中旬にかけて順次行われた。方法は、水田および畑地1枚につき、1～3個所の試掘坑（1×1m）を設定し、出土遺物の有無、土層の確認を行うというものである。

調査結果は、上述した3地区においては未周知の遺跡（新発見遺跡）の存在は確認されなかった。また、麻畑原C遺跡についても、出土遺物は確認されず、本調査の必要はないものと判断した。

調査成果の公開

平成12年9月9日（土）に道下南遺跡において、現地説明会を実施し、50人ほどの参集者があった。まず、現地にて遺構の説明を行い、その後、代表的な遺物の解説をした。

以上のほか、十日町市土地改良区報Vol.8において道端A遺跡、また、市報とおかまちNo.834では今年度の主な発掘調査の成果を紹介している。

1次整理作業

ここでいう1次整理とは、出土遺物を「水洗・注記→分類・整理→接合・復元（→図化）」する一連の作業のことである。

道端A・B遺跡と道下南遺跡の整理作業は、それぞれ県営中山間地域総合整備事業と市道高山太子堂線道路改良舗装事業に伴うものである。これらの遺跡については、1次整理終了後に発掘調査調査概要報告書を刊行した。

馬場上遺跡と上塚原A遺跡などの確認調査および試掘調査の整理作業は、国庫および県費の補助金交付に伴うものである。これらについては、整理作業終了後に『平成12年度 十日町市内遺跡試掘・確認調査報告書』を刊行している。

以上のほか、緊急雇用対策事業（3年継続の2年目）に伴い、1次整理の終了していない野首遺跡（縄文時代中～後期・平成8年調査）と寿久保遺跡（縄文時代中～後期・平成9年調査）の整理作業を継続して行った。とくに野首遺跡については、遺物の出土量が膨大であり、1次整理の完了までにあと3年ほどを要すると思われる。（菅沼 亘）

2. 埋蔵文化財等調査報告書刊行事業

平成10年度に、遅ればせながらようやく笹山遺跡の発掘調査報告書を刊行することができた。これを契機に、平成11年度から市の新長期発展計画に継続事業として、埋蔵文化財等調査報告書刊行事業が組み込まれることになった。この事業名称に「埋蔵文化財等」とあるのは、埋蔵文化財（遺跡）だけではなく、各種文化財資料の調査、整理、研究および報告・公表という意味合いであり、当面は民俗資料の越後アンギン及び関連資料も対象にしている。

さて、平成12年度は、昨年から見直しを始めた馬場上遺跡の土器実測と遺構図面等の再整理がほぼ終了したので、以後は土師器・須恵器などの土器トレース図の作成に移り、予算をにらみながら作業を依頼（発注）した。この作成は、平成11年度にデジタル技術による機械実測・トレース方法を、伊達八幡館跡・河原田遺跡などの中世・近世遺跡の出土陶磁器に採用してみたところ、若干の難点もあるが相対的には有効であり、かつその高率性と廉価性に魅力があったので、本年度は人力による作業からデジタル方式に切り替えてみた。

機械による実測図のトレース方法は、詳しくは解らないが、パソコンのスキナーで読み込み、デジタル信号化して描画する。報告書のサイズをA4判とした場合、土師器・須恵器などの土器は、おおよそ実物の3分の1ほどに縮小されて掲載されること

になるので、トレース線の太さに注意を要する。これには「決り」があるわけではなく、因みに機械であるのでどのような太さの線でも可能とのことであるが、都道府県や市町村の教育委員会など、依頼主によってまちまちであるという。馬場上遺跡では、土器の輪郭線と断面線を0.5mm、中心線を0.4mm、形状線を0.3mm、刷毛目(はけめ)などの整形、調整痕を0.1～0.2mmとした。

次に、トレースに当たってはまず幾つかのタイプに分類することにした。これは、馬場上遺跡が古墳時代から奈良・平安時代にわたる遺跡で、土器の器種が坏・高坏・器台・碗・鉢・蓋・壺・甕など変化に富んでいることと、コスト面からの必要性もあったためである。基本的には器種、器体の大小にかかわらず、成形および整形、調整の単純なものから複雑の程度によって、A～Dの4タイプに大別し、それをさらにA1・A2……のように数細分した。この既存実測図のトレース作成は、予算の関係から次年度の前半期くらいまで延びてしまいそうである。また、この馬場上遺跡の一部は、本年度水田改良工事に伴い緊急の遺跡確認調査（第7次）が行われ、出土遺物が若干追加されることになった。

なお、年度当初に予定した遺跡発掘調査報告書に係る年次計画と事業費のおおよその見積もりは下表のとおりである。

(阿部恭平)

遺跡発掘調査報告書に係る年次計画予定表
(新長期発展計画ソフト事業5ヶ年計画)

[文化財課・博物館]

(単位：千円)

報告書事業名 (刊行名)	業 務 内 容 位置、面積、出土状況とその時代の特色、印刷部数及び単位など下欄に担当者名を記入	業 務 の 進捗状況	事 業 費				
			平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
馬場上遺跡 発掘調査報告書 ※関連する市内の古代 遺跡のデータ等も 収録する	位置 西本町1丁目 調査 昭和49～50・55・59年、平成12年 調査面積 約15000㎡ 遺跡の時代 古墳・奈良・平安・中世 特徴 県内有数の大規模な古代集落遺跡である。出土品は一括して平成2年に市文化財に指定。 [担当：主任 阿部、副主任 石原・菅沼]	二次整理作業 平成10年秋～ (継続中)	整理費 4,700	印刷・ 製本費 4,800			
幅上遺跡 発掘調査報告書 ※関連する市内の古代 遺跡のデータ等も 収録する	位置 西本町1丁目 調査 平成2年 調査面積 約5500㎡ 遺跡の時代 縄文時代中期 特徴 掘立柱建物跡が数多く検出され、火焔型・王冠型土器も出土。 土製品が豊富。出土品は一括して平成12年に市文化財に指定。 [担当：主任 石原、副主任 菅沼・阿部]	整理作業 一次整理は済		整理費 15,000	印刷・ 製本費等 5,500		
伊達八幡館遺跡 発掘調査報告書 ※関連する市内の古代 遺跡のデータ等も 収録する	位置 西本町1丁目 調査 昭和62年 調査面積 約12000㎡ 遺跡の時代 縄文・中世 特徴 県内有数の大規模な中世館跡である。出土品は一括して平成11年に市文化財に指定。 [担当：主任 阿部、副主任 石原・菅沼]	整理作業 一次整理は済			印刷・ 製本費 15,000	印刷・ 製本費等 5,500	
野首遺跡 発掘調査報告書 ※関連する市内の古代 遺跡のデータ等も 収録する	位置 西本町1丁目 調査 平成元・7・8年 調査面積 約8000㎡ 遺跡の時代 縄文・中世 特徴 笹山遺跡をしのぐ大規模な縄文集落遺跡である。火焔型・王冠型土器も多数出土。出土品は重要文化財級との呼び声高い。 [担当：主任 菅沼、副主任 石原・阿部]	整理作業 一次整理の途中 (あと3年かかる) 平成9年春に 概要報告書を刊行	緊急地域 雇用対策 事業による 整理費 3,000	緊急地域 雇用対策 事業による 整理費 2,460		整理費 15,000	印刷・ 製本費等 5,500

IV. 調査・研究

佛像調査報告Ⅱ

西川新次

1. 木造 阿弥陀如来及び両脇侍立像 3 軀

四日町 神宮寺

	像高	髪際高	台座全高
阿弥陀如来	110.5	103.0	31.0
左脇侍	117.0	97.5	23.0
右脇侍	118.5	99.5	22.0

(単位: cm)

◇阿弥陀如来像

木造。呉粉下地・漆塗。肉髻珠(嵌入、亡失)。白毫・水晶製(嵌入)、玉眼。

◇両脇侍

各木造、寄木造。白毫・水晶(嵌入)、玉眼。宝冠・各銅製・鍍金(吹玉付)。

宝暦 11 年(1761)から明和 6 年(1769)の間に建立された山門楼上の正面厨子に安置されている。

中尊は、両腕を屈し、共に掌を前にして立て第一・二指を捻じて立つ、いわゆる上品中生印の阿弥陀如来像の姿であるが、両手首先は近世の後補で、当初のさまは明らかでない。

現状から類推すると、本像は製作当初は、本体と台座(蓮肉部)を共彫りする一木造像で、内割りもなかった。しかし、朽損がいちぢるしくなったため、近世になって裾に横に鋸を入れて台座を切り放し、さらに、像の底から正面肩下がりまでを鋸で前後に切り放し、背面から短冊形の削りを施した。

また、頭部も傷みがひどかったため、改めて頭部を新作し(首柄を含めて前後二材矧)、体部に首柄孔を穿ってこれを留めたというのが実情かもしれない。この折り、荒れた体部にもノミを入れて表層を削り直したとみられ、ほとんど源容をうかがえないのが残念である。

しかし、両腿から Y 字状に流れる衣文の彫りなどに、旧状を偲ばせるものがあり、本来は平安時代にさかのぼる古像だったと想定される。

表面全体に施された呉粉下地・ベンガラ漆彩は近世の補彩で、雲烟を浮彫りにする光背、五重の蓮華

座(共に木造、漆箔)もその折りの作であろう。

なお、本体正面の内割り部の広い範囲に、墨書の痕跡が認められるが、何故か抹消されて読み難くなっている。

両脇侍像のうち、左方分は、左手に蓮華を捧げ、右手は屈臂し、掌を前にして立て、第一・二指を捻ずる通途の観音の形であるが、右方分は合掌して来迎の弥陀に従う手勢を表わしているのが珍しい。しかし、本尊に従う一具像として、近世に作られたのであろう。その均整の整った姿、練達の彫技からみて、京仏師の作と推定される。

以上のように、神宮寺山門楼上にある阿弥陀三尊像の中尊は、芯は古いのであるが、大分改造されている残念である。両脇侍像は、中尊が楼門に祀られた時に、三尊として形を整えるため、京仏師に注文して作らせたのであろう。

2. 木造 阿弥陀如来立像 1 軀

川原町 来迎寺

像高	髪際高	台座全高	受座幅	蓮華高
42.5	39.3	10.0	3.5	6.5

(単位: cm)

本体。木造。肉身ベンガラ漆塗、衲衣漆箔。肉髻珠水晶製(嵌入)。玉眼。

台座。木製。蓮華、敷茄子および受座各漆箔。以下漆塗。

偏衫の上に偏袒右肩の大衣をまとい、来迎印を結んで立つ阿弥陀如来像で、腹前に沿って、わずかに下衣の縁がみえる。

その頭体幹部は一材製で、肩下り以下の背面を豎に割り矧ぎ、両肩以下の体側部、両臂以下の袖部、両手首、両足先などが矧ぎつけられている。なお、面相部は玉眼を入れるために、豎に割り矧ぎされている。

唇や小鼻の小さく緊るおだやかな表情で、なだらかな体軀の起伏に従って流れる衣のひだも、よく整えられ、かつ自然の趣を失っていないところから、鎌倉時代後期の作と推定される。

彩色・漆箔、両手首先、右足先等は後補で、左足先が失われている。台座・受座裏に「享禄三寅年」(1530)の墨書があり、蓮華・敷茄子・受座(各漆箔)は、この時補われたのであろう。なお、それ以下の部分(漆塗)は近世の補作とみられる。

以上、来迎寺の仏像は、熟視してみると鎌倉時代後期の特色がよく表れていて、小像ながら佳作と思われる。また、享禄銘は台座が作られた時のものとみられる。伝来は分からないながら、他阿上人の時代に遡るころの作とはいえるだろう。

3. 木造 聖観音立像 1 軀

新宮 牧脇観音堂

像高	髪際高	台座全高
87.5	76.5	22.0

(単位：cm)

木造。古色(ベンガラ漆彩)。白毫水晶製(嵌入)。玉眼。

左手に未開の蓮華を捧げ、右手は、屈臂して掌を半ば内に向け、第一・二指を捻じて花を開くさまを表わす通行の印相を採るが、上半身は肉身を現わさず、偏衫の上に偏袒右肩の大衣をまとして立つ。

このような着衣の聖観音立像は、わが国では鎌倉時代に入宋僧によって採用されて以来、まま各地で造立されている。

その構造は、頭部は耳前で前後に矧ぎ、差首とし、体部は背面襟側で背部を矧付け、これに袖を含む体側部を矧付け、両臂前の前膊部(袖を含む)、両手首、両足先を別矧ぎとし、内刳りが施されていると推定される。

少し、あごの張った平滑に面に配された細く見開く目や、やや厚い上唇をもつ面貌表現は端正で、総体に形式に則りながら、破端なくまとめられている。本像の伝来に関しては、元亀三年(1572)縁起が残っている。その表現からみて、製作はこれを大きく遡るものとはいえないが、作風は堅実である。

以上、牧脇観音堂の仏像は、堅実な作風をもつ像

ではあるが、その製作年代は縁起の年代から遡るとはいえない。縁起の価値づけでどのように扱うかということになるかと考えられる。

※本稿は、平成7年8月20日(日)に行なわれた、故西川新次先生(慶應義塾大学名誉教授)による第2回佛像調査の報告書である。この報告書により、平成7年度には来迎寺の阿弥陀如来像が、12年度には牧脇観音堂の聖観音立像が市指定文化財に指定されている。



神宮寺山門阿弥陀如来像調査



削られた墨書銘



来迎寺での調査



牧協観音堂での調査



来迎寺阿弥陀如来像



牧協・聖観音像



同上

【新収蔵資料から】

今年度収集した資料の中に、37～8年程前、川西町室島から十日町市下条地内に居を移された増田一吉氏より寄贈された、八曲の屏風がある。

一面の寸法が縦123cm、横45cmほどの小型屏風で、色紙、短冊や扇面等が各面にいくつも貼り付けられている。

若干古びてはいるが、保存状態はそれほど悪くなく、これといった損傷カ所も見当たらない。

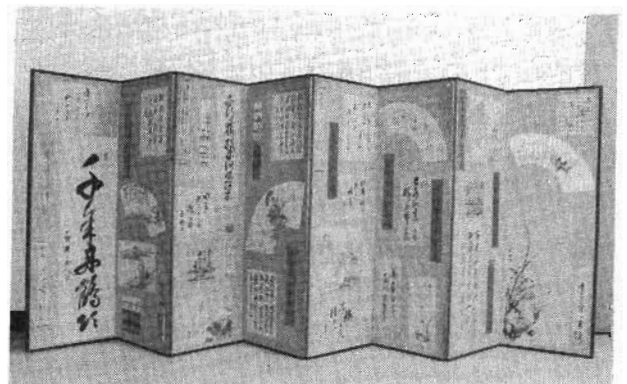
よく観察してみると色紙、短冊や扇面等は45ほどあり、内訳は色紙等24、短冊17、扇面4となる。内容は漢詩や俳句などの書が多いが、画も10枚あり、その中には画と書の描き込まれた扇面や、画に句が添えられた色紙もある。

中には署名の無い色紙等もあるので、人物が特定できないものもあるが、署名のある人物を拾っていくと、多くは江戸時代末期から明治の前半に活躍した魚沼・妻有地方の画人や文人たちの書き残したも

のであることがわかる。氏名を書き出してみよう。鈴木牧之、新井文圭、小杉蘿齋、岡田雲洞、小林克明、大海海了ほか、喜山、南枝、文晁…。

また、年代の確定できるものが一枚だけある。新井文圭筆の扇面に甲寅とあり、この年は安政元年(1854)にあたる。

この屏風の内容や背景、文人の交流などについては、今後更に詳しく調べてみたい。(竹内俊道)



貼り混ぜ屏風

伯父ヶ窪地内採集の石剣

菅 沼 亘

はじめに

ここで紹介する石剣は、波間秀三氏により市内川治地区の伯父ヶ窪地内において採集された資料である。伯父ヶ窪地内には、伯父ヶ窪A遺跡と同B遺跡が存在するが、この資料がどの地点で採集されたのかは不明である。なお、資料は十日町市博物館に寄贈され、考古展示室において公開されている。

遺跡の位置と概要

伯父ヶ窪A・B遺跡は、国道117号と253号の交差点の南東約1km、信濃川右岸の河岸段丘上（城山I面）に位置する（第1図）。遺跡は、段丘の緩斜面上に立地し、標高は240～250mである。両遺跡は、1970年（昭和50）に国営苗場山麓第3地区総合農地開発事業に伴い、市教育委員会により試掘調査が行われている。

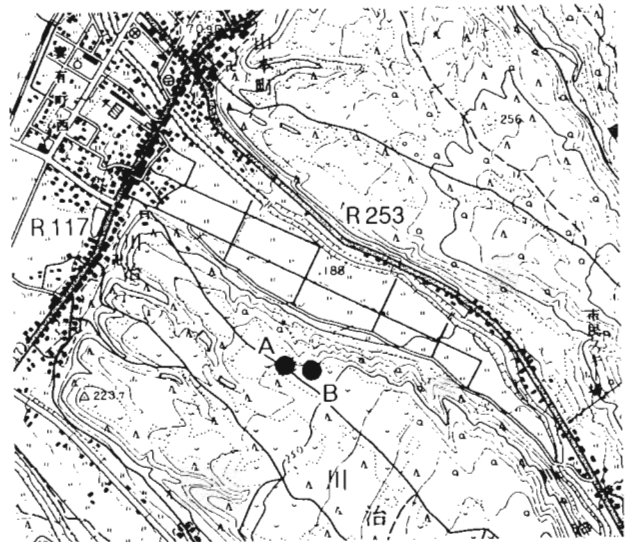
伯父ヶ窪A遺跡では、縄文時代中期中葉～後葉を主体として、早期後葉～中期後葉の土器が出土し、石組炉1基が発見されている。同B遺跡では、中期後葉の土器などが出土している。また、地点は不明であるが、前期後半～中期中葉の土器、石鏃、石匙、打製石斧なども採集されている（十日町市1996）。

石器の記載

以下、部位ごとに記載を行う。各部の名称および形状などについては、角田真也氏の記述に基づいた（角田1998）。石材は、黒色粘板岩である。

頭部は、円筒形であり、横断面は楕円形を呈する。側面には、細い沈線により一対の長方形区画が彫刻され、摩滅のため明瞭でないが、区画には矢羽状の沈線が巡るようである。また、それぞれの区画のほぼ中央には、豆粒状の突起が付き、その片方は欠損する。頭部下面には石器長軸に直交する研磨痕が明瞭に残されている。頭頂部は、わずかに膨らみ、細かな研磨痕と敲打痕が残る。

頸部には、鉢巻状の隆帯が巡る。隆帯の横断面は、ほぼ円形を呈している。隆帯の側面には、沈線が刻まれるようであるが、摩滅のためあまり明瞭でない。上面と下面には石器長軸に直交する研磨痕が見られる。また、頭部と頸部の間には、敲打痕と石器長軸に直交する研磨痕が観察される。なお、突帯の一部は欠損している。



第1図 伯父ヶ窪A・B遺跡の位置（1：25,000）

胴部は柱状であり、横断面は円形を呈する。中央部は、わずかに膨らむが、頸部に向かって細くなる。胴部は、石器長軸に平行する研磨痕に覆われ、頸部の隆帯に接する部分と中央から先端部にかけて敲打痕が観察される。先端部は、錐状に緩やかに尖り、横断面は円形を呈する。胴部に比して、細かな研磨痕が見られる。

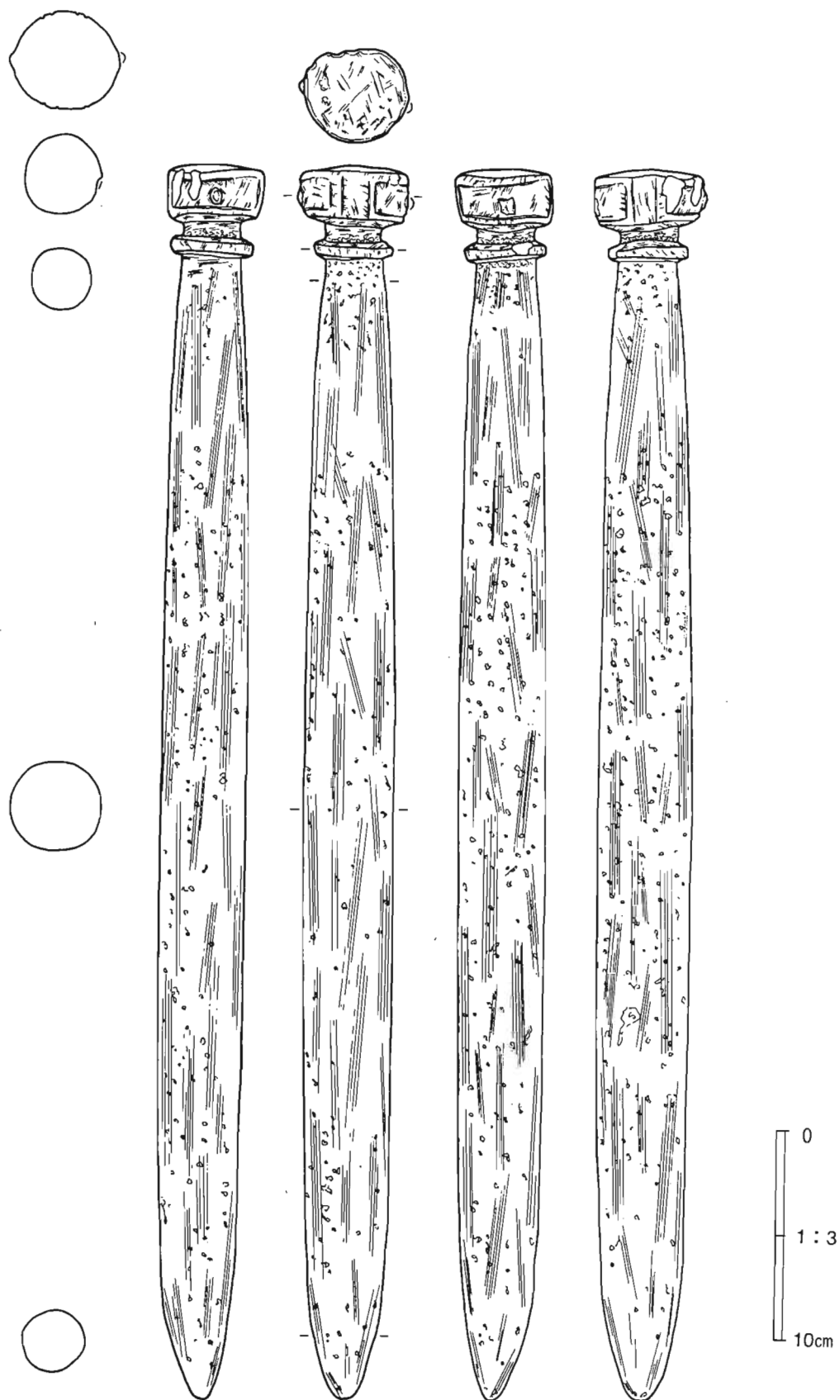
計測値は、最大長：58.40cm、最大径：5.23cm（頭部）・2.68cm（頸部）・3.82cm（隆帯）・4.32cm（胴部）、重量：1729.53gである。

まとめ

本資料は、頭部の形態と文様、頸部に巡る隆帯から角田氏による石棒分類（角田前掲）の両頭系列十王堂型に属すると思われる。しかし、本資料は単頭であり、この点で相違が見られる。

また、同氏によるとこの類型の分布範囲は北海道・東北地方を中心とし、長野・富山まで広がり、時期は後期後半とされている。特に、頭部に刻まれた方形区画と矢羽状の沈線は、加曾利B式土器に類似するということであるが、これまでに伯父ヶ窪地内において当該期の土器は採集されていない。

十日町市における後期の石棒（寿久保遺跡・野首遺跡・栗ノ木田遺跡など）では、石材に緑泥石片岩が使用されており、黒色粘板岩は本資料のみである。前者は主に関東・中部地方、後者は東北地方で多用されるといわれている。



第2図 伯父ヶ窪地内採集の石剣

本資料からは、その形態的特徴と使用石材において東北地方との関連をうかがうことができる。

参考文献

十日町市 1996 『十日町市史』資料編2・考古

角田真也 1998 「細形石棒の研究」『國學院大學考古学資料館紀要』第14輯

後藤信祐 1999 「遺物研究 石棒・石剣・石刀」『縄文時代』10

V. そ の 他

笹山遺跡出土品

国宝指定1周年記念事業

平成12年に、笹山遺跡出土品国宝指定1周年記念と銘打って十日町市博物館で行なわれた各種事業の概要を紹介する。

1. 梅原猛講演会

期日：7月8日(土) 15:00～16:30

会場：十日町市民会館

演題：縄文文明の意味

哲学者の梅原猛氏は、笹山遺跡出土の火焰型土器に注目し、いち早く国宝に推薦するなど、広く世間に紹介して下さった方である。国宝指定を機に、博物館の名誉館長に就任いただいた。

氏の講演会は、博物館の考古展示室オープン記念で来市した平成3年に次いで2度目であるが、今回は国宝指定後初の名誉館長としての来市ということで、特別の感慨を持たれたようであった。

講演では縄文時代を独自の文明ととらえる視点から、氏の持論でもある自然との共生や循環の思想を基に、新しい時代の新たな価値観の創造に必要な原点が縄文時代にあることを強調し、大胆な推論を展開した。

会場の市民会館には、約600人の市民が参集し、盛大な講演会となった。

翌日、氏は国宝が出土した笹山遺跡を訪れ、今年設置されたばかりの火焰型土器出土状況模型を視察し、集まった地元中条地区民とも言葉を交わした。

2. 特別展 縄文の祭祀

期間：9月22日(金)～10月22日(日)

展示会場：特別展示室

11年度の国宝指定記念特別展に続き、笹山遺跡出土品を核とした特別展。縄文世界を窺い知る上で重要な祭祀をテーマに、華やかな火焰型土器の陰に隠れた感のある土偶、石棒などの第二の道具類にスポットを当てて次のような構成とした。

①自然への畏れと対処、②祀りのかたち、③祀りと祈り、④この世とあの世。

笹山遺跡はか市内の遺跡に巻町、新津市、長岡市、

新発田市の遺跡出土物と、故縄文人氏コレクションも加えて、展示資料は約200点。期間中の入場者は2,865人だった。また、会場では展示解説ボランティアが説明にあたった。

記念講演 会場：情報館視聴覚ホール

期日：9月24日(日)13:30～15:30

演題：縄文の祭祀

講師：大工原 豊氏(安中市教育委員会)

特別展を記念して、講演会を開催。講師の大工原氏は、祭祀遺跡の分析と天文学の知識などを基にコンピューターを使い、縄文人の祭祀の実態を復元する試みを展開した。とても興味深い講演だった。

3. 火焰フォーラムⅡ「縄文文明と火焰型土器」

期日：10月1日(日)13:30～16:30

会場：情報館視聴覚ホール 参加者：104名

縄文時代と火焰型土器の謎を探り、火焰型土器の研究及び周知と、情報交換を目指した企画。平成8年に続いて2回目の試み。

(1)基調講演

講師：土肥 孝氏(文化庁主任文化財調査官)

演題：縄文中期社会における火焰形土器

講演の中で火焰型土器を「見られることを意識した結果」と類推し、芸術性を持った作品と解釈できる点を指摘した。

(2)シンポジウム「笹山遺跡の謎に迫る」

パネラー 木島 勉氏(糸魚川市長者ヶ原考古館学芸員)

小林 深志氏(茅野市尖石縄文考古館学芸員)

長谷川福次氏(北橘村教育委員会文化財係長)

三ツ井朋子氏(県埋蔵文化財調査事業団文化財調査員)

コーディネーター 土肥 孝氏

パネラーは、それぞれ翡翠、土偶、装飾品、赤色顔料研究などの専門的立場と発掘調査員としての眼で笹山遺跡と火焰型土器を語り、参加者との質疑応答もあって熱心な討論が行なわれた。

(3)資料集刊行

基調講演講師とシンポジウムパネラーの発言要旨を踏まえた論文と、火焰型土器のデーターを載せた資料集を刊行。参加者に配布。一般にも頒布した。

4. 火焰型土器No.1

マスコットキャラクターと愛称募集

火焰型土器及び笹山遺跡のより広い周知のために、7月8日～12月25日の間公募した。締切りまでに全国からマスコットキャラクター部門103通、愛称部門201通の応募があった。

この中から、マスコットキャラクター部門は燕市・信貴正明氏、市内中条・中林佳世子氏、長野県大桑村・川本智氏の3作品が、愛称部門は新潟市・佐藤哲夫氏の「炎舞」、市内中条・藤木悌次氏の「火焰の華」、福島県郡山市・高橋順子氏の「縄文の舞」が佳作として選ばれ、雪まつり会場で発表・表彰され賞金が贈られた。

最優秀賞は該当者がなかった。

5. その他

博物館講座

記念事業には特に組み込まなかったが、例年開催している博物館講座も「縄文研究最前線－縄文時代はここまで見えてきた！」をテーマにうたって4回開講し、年間事業の中で整合性を持たせた。

《タイトルと講師及び受講者》

- | | |
|-------------------------------|-----|
| 第1回(7/29) 縄文時代の住環境 | 58名 |
| 講師：荒川隆史氏（新潟県埋蔵文化財調査事業団 主任調査員） | |
| 第2回(8/5) 縄文時代の生活復元 | 55名 |
| 講師：渡邊裕之氏（県立歴史博物館 学芸員） | |
| 第3回(8/12) 縄文世界の精神風土 | 48名 |
| 講師：原田昌幸氏（文化庁 文化財調査官） | |
| 第4回(8/19) 縄文人の交流と交易 | 50名 |
| 講師：高橋保雄氏（朝日村奥三面遺跡調査室） | |

いずれの講師も、学会や現場の最前線に行く研究者らしく、具体例を挙げた話には説得力があり、向学心に燃える大勢の受講者に好評だった。また、受講者の中からは、学問研究の最先端に触れることができたといった声とともに、講師の担当する発掘現場に足を運んできたと言う話も耳にした。

（竹内俊道）



梅原猛講演会



特別展「縄文の祭祀」



シンポジウム

マスコットキャラクター
〈佳作作品〉

←燕市
信貴正明氏

市内中条 ⇨
中林佳世子氏

長野県大桑村⇨
川本 智氏

文化財資料の活用

国宝・笹山遺跡出土深鉢形土器57点のうち、火焰型土器2個と王冠型土器1個は、平成11年10月以来、個体の入れ替えはあるものの、東京国立博物館・平成館の平常展示の目玉となっており、検討課題もあるが、まさに「縄文大使」の役を果たしている。本年は国宝指定1周年を記念して、笹山遺跡に火焰型土器（No.1）の出土状態を実物大のセラミック模型で設置した。また地元では、記念事業として6月3～4日に第1回目の「笹山じょうもん市」を開催し、当課（博物館）もこれに併せて移動博物館「笹山遺跡とその出土品展」を開設した。

本年度の実物および主な写真資料の貸出し状況は表1、2のとおりである。

（阿部恭平）

表1 文化財資料の貸出し状況一覧（レプリカを含む2000.3～2001.3） ※市内貸出しを除く。

貸出施設名	特 別 展 示	貸 出 資 料 名	貸 出 期 間	観 覧 料
東京国立博物館	文化財保護法50年 記念「日本国宝展」	国宝・新潟県笹山遺跡出土品のうち、火焰型土器（No.1）（No.4）2個、王冠型土器（No.16）1個	貸出 3/13～5/15 会期 3/25～5/7	一般 1300円 （団体 950円）
三方町縄文博物館	常設展示・土器の怪	笹山遺跡出土縄文土器のうち、国宝・火焰型土器（No.2）（No.5）（No.14）レプリカ（縄文中期）3点、火焰型土器（縄文中期）1点、王冠型土器（縄文中期）1点 計5点	貸出 3/22～9/20	一般 210円 （団体 160円）
東京国立博物館	文化財保護法50年 記念「日本国宝展」	国宝・新潟県笹山遺跡出土品のうち、火焰型土器（No.6）1個、王冠型土器（No.15）1個	貸出 4/1～5/15 会期 3/25～5/7	一般 1300円 （団体 950円）
東京国立博物館	平成館の平常陳列 に活用	国宝・新潟県笹山遺跡出土品の火焰型土器（No.8）1個	貸出 4/1～5/15	一般 420円 （団体 210円）
東京国立博物館	平成館の平常陳列 に活用	国宝・新潟県笹山遺跡出土品の火焰型土器（No.4）（No.7）2個、王冠型土器（No.16）1個	貸出 4/1～3/31	一般 420円 （団体 210円）
佐野市郷土博物館	第34回企業展「縄文時代の暮らし」	野首遺跡出土深鉢型土器ほか7点、野首遺跡出土土偶ほか6点、アンギン・ソデナシ（模造品）、アンギン・オビ（模造品）、アンギン・編み工具（模造品）、アンギン材料（カラムシ） 計17点	貸出 4/24～6/21 会期 5/3～6/15	一般 210円 （団体 100円）
笠懸野 岩宿文化資料館	第29回企業展「よみがえれ古代人」	アンギン編機1点、アンギン編み製品1着、カラムシの撚糸1束	貸出 7/5～9/27 会期 8/1～9/17	一般 300円 （団体 200円）
リージョンプラザ上越 新潟県立上越科学館	上越科学館夏期企画展「雪の結晶のふしぎ」	高橋喜平氏の雪の造形写真50点	貸出 7/19～9/2	
鹿児島市立ふるさと考古歴史館	燃える縄文文化—山と森にはぐくまれた縄文土器—	野首遺跡出土火焰型土器ほか 計6点	貸出 9/26～11/30 会期 10/5～11/26	一般 200円 （団体 160円）
葛飾区・十日町市商工観光課	葛飾区産業フェア	アンギン編機一式、コモツチ20ヶ、ソデナシ（本物）1着、ソデナシ（偽物）1着、オビ（複製）1本、カラムシセンイ1束	貸出 10/25～10/30 会期 10/25～10/30	
東京国立博物館	特別展「縄文の造形—縄文の動・弥生の静—	国宝・新潟県笹山遺跡出土品の火焰型土器（No.6）1個	貸出 1/30～3/31 会期 1/30～3/11	一般 830円 （団体 560円）

表2 出版関係への文化財資料の貸出し状況一覧（実物以外のポジ・ネガ・紙焼き、2000.4～2001.3）

貸出先出版社名	書籍名・刊行物名	貸出資料名	区分	備考
佐野市郷土博物館	縄文時代のくらし	野首遺跡出土深鉢型土器、蓋型土器、鉢型土器、注口土器、土偶、石器ほか アンギン編み工具（人物付）、原生カラムシ、アンギンソデナシ・工具ほか	図録	栃木
朝日新聞	新聞及び新聞データベース	信濃川の昔の写真	一般	新潟
広島市江波山気象館	企画展「ふわっとホワイト、WHAT雪国のくらし展」写真展示	昭和20年の豪雪、茅屋根の雪掘り、雪申しでの雪運び、道踏み	一般	広島
鹿児島市立ふるさと考古歴史館	企画展展示説明用パネル	野首遺跡出土状況ほか2点	一般	鹿児島
(株)マール社	「日本文明論」 頼潮陽著	火焰型土器（No.1）	一般	東京
(株)秀学社	中学校用美術科副読本	国宝・新潟県笹山遺跡出土品の火焰型土器（No.1）	教材	大阪
光村図書出版(株)	高等学校美術科教科書「美術1」	火焰型土器（No.1）	教材	東京
新潟県歴史博物館	「縄文造形の心に迫る」 テレビ放映用	火焰型土器出土状態	一般	新潟
(株)学宝社	中学校用「1・2年の補強学習」及び「1・2年の補強ドリル」	火焰型土器（No.1）	教材	愛知
(株)正進社	中学総合歴史	笹山遺跡出土キャリバー状深鉢土器	教材	東京
(株)きものアイ	「きもの絵巻館」ホームページ	火焰型土器（No.1）	一般	新潟
東京国立博物館	特別展「縄文の造形—縄文の動・弥生の静—」	国宝・新潟県笹山遺跡出土品の火焰型土器（No.6）	図録	東京
(株)学習研究社	「歴史群像シリーズ戦国セレクション」上杉謙信	カラムシ（青苧）	一般	東京
実教出版(株)	高等学校用教科書「理科総合A」	火焰型土器（No.1）	教材	東京
(株)乃村工藝社	ホテル京セラ「縄文遺跡ミュージアム」解説パネル	新潟県笹山遺跡出土国宝・火焰型土器（No.1）、博物館全景、縄文ムラのくらし・秋の一日・冬の一 日・竪穴住居の内部	一般	東京

（作表：岩田恵美子・阿部恭平）

〔追記〕

上記の外90件余りに、パンフレット、ポスター、チラシ、会報、ハガキなどを作成するためにポジ、ネガ、紙焼きなどを貸出している。

文化財資料データー

1. 博物館収蔵の考古資料

(1)指定文化財

国 宝	笹山遺跡出土深鉢形土器	57点
	附一、土器・土製品類	72点
	一、石器・石製品類	791点
	一、ベンガラ塊	8点
	計	928点

市指定 馬場上遺跡出土品 一括
(平箱 200箱、復元土器 170個体)

市指定 笹山遺跡出土品 一括(国宝を除く)
(平箱 1,500箱、復元土器 180個体)

市指定 伊達八幡館跡出土品 一括
(平箱 40箱、復元土器 なし)

市指定 幅上遺跡出土品 一括
(平箱 520箱、復元土器 44個体)

※35cm×50cm×10cmの大きさの平箱で換算

(2)それ以外の発掘資料及び採集資料

下条地区	野首遺跡ほか	平箱約	5,000箱
中条地区	原田B遺跡ほか	平箱約	300箱
十日町地区	下梨子遺跡ほか	平箱約	50箱
川治地区	栗ノ木田遺跡ほか	平箱約	500箱
水沢地区	赤羽根遺跡ほか	平箱約	1,400箱
吉田地区	小坂遺跡ほか	平箱約	400箱
	計		7,650箱

※35cm×50cm×10cmの大きさの平箱で換算

この他に、波間秀三(故人)、小川秀政(故人)、
福崎敏朗、角山誠一、島田靖久、高木伸博などの
各氏から寄贈または寄託された考古資料がある。

2. 博物館収蔵の民俗資料

(1)指定文化財

重 文	越後縮の紡織用具及び関連資料	
(内訳)	原料調製用具	104点
	紡織用具	980点
	仕事場用具	348点
	販売用具	171点
	製品	213点
	信仰・儀礼用具	91点
	関連文書類	177点
	文献	14点
	計	2,098点

重 文 十日町の積雪期用具

(内訳)	衣生活用具	569点
	食生活用具	655点
	住生活用具	575点
	生産・生業用具	1,285点
	交通・通信用具	97点
	運搬用具	171点
	社会生活用具	19点
	民俗知識用具	25点
	娯楽・遊戯用具	226点
	信仰・儀礼用具	246点
	計	3,868点

市指定 越後アンギン及び関連資料 一括

(2)それ以外の収集資料

雪、織物、信濃川に関する資料を中心に、歴史
資料を含めた民俗資料は、10,000点以上ある。

3. 寄贈された博物館資料

～1990年 3月	台帳No.	～ 7,605
1990年 4月～1991年 3月	台帳No.7,606～	8,679 (1,074件、1,678点)
1991年 4月～1992年 3月	台帳No.8,680～	9,167 (488件、 649点)
1992年 4月～1993年 3月	台帳No.9,168～	9,703 (536件、 758点)
1993年 4月～1994年 3月	台帳No.9,704～	10,122 (419件、 549点)
1994年 4月～1995年 3月	台帳No.10,123～	10,606 (484件、1,287点)
1995年 4月～1996年 3月	台帳No.10,607～	11,440 (834件、1,292点)
1996年 4月～1997年 3月	台帳No.11,441～	11,787 (347件、 719点)
1997年 4月～1998年 3月	台帳No.11,788～	11,950 (163件、 200点)
1998年 4月～1999年 3月	台帳No.11,951～	12,196 (246件、 351点)
1999年 4月～2000年 3月	台帳No.12,197～	12,384 (188件、 205点)
2000年 4月～2001年 2月	台帳No.12,385～	12,616 (231件、 371点)

4. 関連文献一覧

〔考古関係〕

- ①十日町市文化財調査報告2『小坂遺跡』 1961. 3刊 60頁
- ②『十日町市苗場山麓地域農業開発事業予定区域内遺跡分布調査（第1次）概報』 1974. 3刊 79頁
（収録遺跡）城之古、上塚原A、上塚原B、大沢、伯父ヶ窪A、伯父ヶ窪B、西浦、中山A、中山B、中山C、深沢、城之古第1号～第3号塚、麻畑原A、麻畑原B、城倉、つつじ原A、つつじ原B、伊達、天池A、天池B、天池上原、赤羽根、寺山、寺山塚、南雲、南原、干溝原、桜ヶ丘、桃山、珠川A、珠川B、大井久保、ぼんのう、水穴、カタガリ、馬場神社、椿池、宮栗、牛ヶ首、宮栗上原、横割、牧脇、小黒沢火葬墓、山谷セツ塚、鎧塚など47遺跡
- ③十日町市文化財調査報告6『十日町市広域パイロット地域内遺跡群調査概報』 1975. 3刊 28頁
（収録遺跡）桃山、珠川A、珠川B、大井久保、ぼんのう、カタガリ、馬場神社、椿池など8遺跡
- ④十日町市文化財調査報告7『馬場上遺跡―第1次・第2次発掘調査概報―』 1975. 3刊 22頁
- ⑤十日町市文化財調査報告10『馬場上遺跡―第3次・第4次発掘調査概報―』 1976. 3刊 23頁
- ⑥十日町市文化財調査報告11『十日町市広域パイロット地域内遺跡群調査概報2』 1976. 3刊 82頁
（収録遺跡）伯父ヶ窪A、伯父ヶ窪B、中山A、中山B、中山C、城倉、つつじ原A、伊達、天池A、天池B、天池上原、寺山A、寺山B、南雲、南原、干溝原、桜ヶ丘、宮栗、宮栗上原、横割など20遺跡
- ⑦十日町市文化財調査報告14『つつじ原B遺跡』 1979. 3刊 49頁
- ⑧十日町市文化財調査報告18『坪野館跡』 1981. 3刊 60頁
- ⑨十日町市埋蔵文化財発掘報告書第9集『野首遺跡発掘調査概要報告書』 1997. 3刊 40頁
- ⑩同第10集『島A遺跡発掘調査概要報告書』 1997. 3刊 30頁
- ⑪同第11集『寿久保・春山遺跡発掘調査概要報告書』 1998. 3刊 28頁
- ⑫同第12集『原田B遺跡発掘調査概要報告書』 1998. 3刊 20頁
- ⑬同第13集『つつじ原C遺跡発掘調査概要報告書』 1998. 3刊 12頁
- ⑭同第14集『笹山遺跡発掘調査報告書』 1998. 9刊 412頁
- ⑮同第15集『平成10年度十日町市内遺跡試掘・確認調査概要報告書』 1999. 3刊 24頁
- ⑯同第16集『平成11年度十日町市内遺跡試掘・確認調査概要報告書』 2000. 3刊 24頁
- ⑰同第17集『平成10・11年度県営ほ場整備事業上組工区内遺跡発掘調査概要報告書』 2000. 3刊 42頁
- ⑱同第18集『道下南遺跡発掘調査概要報告書』 2001. 3刊 44頁
- ⑲同第19集『平成12年度十日町市内遺跡試掘・確認調査概要報告書』 2001. 3刊 28頁
- ⑳同第20集『道端A・B遺跡発掘調査概要報告書』 2001. 3刊 20頁
- ㉑『ガイドブック 十日町市の遺跡』 1988. 3刊 30頁（1987年度調査分までの概要を収録）
- ㉒『十日町市史資料編2 考古』 1996. 7刊 763頁（1992年度調査分までを収録）
- ㉓『図録 笹山遺跡―国宝指定 笹山遺跡出土品のすべて―』 1999. 8刊 64頁

〔民俗関係ほか〕

- ①十日町市文化財調査報告5『十日町市における文化財の調査Ⅰ 昭和48年度』 1974.12刊 54頁
（内容）琵琶懸城址の実測調査、神宮寺の歴史と文化財、六箇所の歴史と民俗
- ②十日町市文化財調査報告9『十日町市における文化財の調査Ⅱ 昭和49年度』 1976. 3刊 68頁
（内容）魚沼地方の市と縮市、原の民俗、市教委収集の民俗資料目録
- ③十日町市文化財調査報告12『十日町市における文化財の調査Ⅲ 昭和50年度』 1977. 3刊 61頁
（内容）物産取調書と物産会・博覧会、上の山の民俗、市教委収集の民俗資料目録
- ④十日町市文化財調査報告13『十日町市における文化財の調査Ⅳ 昭和51年度』 1978. 4刊 72頁
（内容）上杉氏・堀氏の移封とその検地、赤倉神楽、赤倉の冬の民俗、市教委収集の民俗資料目録
- ⑤十日町市文化財調査報告15『十日町市における文化財の調査Ⅴ 昭和52年度』 1979. 9刊 65頁
（内容）鉢の石仏、石仏地区石造物資料目録、鉢の冬の民俗、木挽きの仕事と生活
- ⑥十日町市文化財調査報告16『十日町市における文化財の調査Ⅵ 昭和53年度』 1980. 3刊 91頁
（内容）魚之田川の民俗、水沢の水運と陸運、十日町の農村歌舞伎舞台、水沢の漁撈、市教委収集の民俗資料目録
- ⑦十日町市文化財調査報告17『十日町市における文化財の調査Ⅶ 昭和54年度』 1981. 3刊 68頁
（内容）神宮寺調査の報告、十日町組の廻米について
- ⑧『妻有の文化財―十日町・川西・中里・津南―』 1982.10刊 58頁
- ⑨『図録 妻有の女衆と縮織り―越後縮の紡織用具及び関連資料―』 1987. 7刊 211頁
- ⑩『雪国十日町の暮らしと民具―十日町の積雪期用具―』 1992.10刊 263頁 （データ集成：石原正敏）

指定文化財一覧

平成13年3月31日現在

〔国宝〕

番号	種別	名称	員数	指定年月日	所在地	所有者・管理者	備考
1	考古資料	笹山遺跡出土深鉢形土器57点 (附 土器・土製品類ほか871点)		平成11. 6. 7	西本町1	十日町市 (博物館)	縄文時代

〔重要文化財〕

番号	種別	名称	員数	指定年月日	所在地	所有者・管理者	備考
2	有形民俗	越後縮の紡織用具及び関連資料	2098点	昭和61. 3. 31	西本町1	十日町市(博物館)	江戸～明治時代
3	〃	十日町の積雪期用具	3868点	平成3. 4. 19	〃	〃	江戸～昭和30年代

〔新潟県文化財〕

番号	種別	名称	員数	指定年月日	所在地	所有者・管理者	備考
4	建造物	神宮寺観音堂・山門	2棟	平成3. 3. 29	四日町	神宮寺	江戸期
5	絵画	山水図剣雲泉筆六曲屏	1双	昭和29. 2. 10	山本	関口芳央	江戸時代末期
6	彫刻	木造十一面千手観音立像	1軀	昭和46. 4. 13	四日町	神宮寺	平安時代後期
7	〃	木造四天王立像(伝広目天・伝毘沙門天)	2軀	昭和49. 3. 30	〃	〃	平安時代末期
8	有形民俗	越後縮幡	74族	昭和49. 3. 30 追加50. 3. 29	吉田山谷 ほか	吉田社ほか6社 (博物館)	江戸～明治時代
9	史跡	大井田城跡		昭和53. 3. 31	中条	十日町市	南北朝期
10	天然記念物	小貫諏訪社の大スギ	1本	昭和53. 3. 31	小貫	諏訪神社	幹囲8.33m

〔新潟県選定保存技術〕

番号	種別	名称	員数	指定年月日	所在地	所有者・管理者	備考
—	選定保存技術	十日町茅葺職人	4人	平成12. 3. 21	—	—	

〔十日町市指定文化財〕

番号	種別	名称	員数	指定年月日	所在地	所有者・管理者	備考
11	建造物	智泉寺山門	1棟	平成6. 3. 23	昭和町3	智泉寺	江戸時代中期
12	〃	観泉院山門	1棟	平成7. 3. 24	土市	観泉院	〃
13	絵画	一遍上人絵詞伝	8巻	昭和54. 9. 12	川原町	小林賢有	〃
14	彫刻	木造阿弥陀如来立像	1軀	平成8. 3. 21	川原町	来迎寺	鎌倉時代後期
15	〃	木造聖観音立像	1軀	平成13. 3. 22	新宮	竜王山講中	戦国期末
16	工芸品	越後縮裂見本帳	2冊	昭和47. 11. 28	本町3	燕木孫右	江戸期
17	〃	十日町市織物歴代標本帳	47冊	昭和62. 2. 23 追加1. 2. 16	西寺町	十日町織物工業協同組合 (博物館)	明治25年～昭和13年 明治42年～昭和8年
18	〃	縮問屋加賀屋の御用縮及び関連資料	110点	平成2. 6. 8	西本町1	燕木元昭 (博物館)	江戸時代後期
19	〃	宮本茂十郎手織の透綾(縮縮)裂地	3点	平成13. 3. 22	〃	十日町織物工業協同組合(博物館)	江戸～明治時代
20	有形民俗	越後アンギン及び関係資料	一括	平成11. 3. 16	〃	十日町市(博物館)	江戸～明治時代
21	古文書	太子堂村検地帳	4点	平成12. 3. 21	〃	若井基八郎 (博物館)	中世～江戸時代初期
22	考古資料	馬場上遺跡出土品	一括	平成2. 2. 22	〃	十日町市(博物館)	古墳時代中期～平安時代
23	考古資料	笹山遺跡出土品(国指定分を除く)	一括	平成2. 2. 22	〃	〃	縄文時代、中世
24	考古資料	伊達八幡館跡出土品	一括	平成11. 3. 16	〃	〃	中世

番号	種 別	名 称	員 数	指定年月日	所在地	所有者・管理者	備 考
25	考古資料	幅上遺跡出土品	一括	平成12. 3. 21	西本町1	十日町市（博物館）	縄文時代
26	歴史資料	旗指物	1 旗	昭和55. 4. 11	六箇山谷	富井清孝	江戸時代初期
27	無形民俗	赤倉神楽		昭和51. 11. 8	赤倉	赤倉神楽保存会	
28	〃	大の坂		昭和59. 1. 26	中条旭町	中条大の坂保存会	
29	〃	新保広大寺節		昭和59. 1. 26	下条本町	新保広大寺節保存会	
30	〃	新水のドウラクジン（道楽神）と ハネツケエーシ（羽根返し）		平成 7. 3. 24	新水	新水地区	
31	工芸技術	越後アングイン製作技術		平成11. 3. 16	西本町1	越後アングイン伝承会	
32	史 跡	四日町神宮寺境内地及び山林		昭和47. 11. 28 追加49. 6. 11	四日町	竹内道雄	江戸期
33	〃	大黒沢正平在銘梵字碑	1 基	昭和51. 1. 10	大黒沢	村山キノエ	南北朝期
34	〃	鉢の石仏		昭和53. 1. 28	鉢	鉢石仏保存会	江戸期民間信仰跡
35	〃	笹山遺跡		平成 4. 12. 3	中条上町	岩田栄十郎ほか	縄文時代、中世
36	〃	羽川（秋葉山）城跡		平成10. 3. 25	六箇麻畑	麻畑・羽川城跡保存会	戦国期
37	名 勝	積翠荘		昭和55. 4. 11	吉田山谷	酒井うめ子	江戸期
38	天然記念物	姿箭放神社大ケヤキ	1 本	昭和63. 7. 20	姿	箭放神社	樹齢約550年、幹囲5.14m
39	〃	高龍神社社叢		平成 1. 10. 3	背戸	高龍神社	
40	〃	安養寺松尾神社の大スギ	1 本	平成 4. 3. 21	安養寺	安養寺地区	樹齢約500年、幹囲7 m
41	〃	安養寺円通庵の三本スギ	3 本	平成 4. 3. 21	〃	〃	樹齢約500年
42	〃	枯木又龍王池とカスミザクラ及び 三本スギ	1ヶ所、 1本、3本	平成 6. 3. 23	枯木又	枯木又地区	
43	〃	入山のカスミザクラ	1 本	平成 9. 3. 24	入山	山本丑松	

■指定文化財管理委託料

《県指定文化財》		(単位：円)
史跡	大井田城跡	6 1,2 0 0
天然記念物	小貫諏訪社の大スギ	1 8,0 0 0
《市指定文化財》		
建造物	智泉寺山門	1 8,0 0 0
建造物	観泉院山門	1 8,0 0 0
史跡	四日町神宮寺境内地 及び山林	6 1,2 0 0
史跡	大黒沢正平在銘梵字碑	1 8,0 0 0
史跡	鉢の石仏	6 1,2 0 0
史跡	羽川（秋葉山）城跡	6 1,2 0 0
名勝	積翠荘	3 6,0 0 0
天然記念物	姿放神社の大ケヤキ	1 8,0 0 0
天然記念物	高龍神社社叢	6 1,2 0 0
天然記念物	安養寺松尾神社の大スギ	1 8,0 0 0
天然記念物	安養寺円通庵の三本スギ	1 8,0 0 0
天然記念物	枯木又龍王池とカスミ ザクラ及び三本スギ	3 6,0 0 0
天然記念物	入山のカスミザクラ	1 8,0 0 0
(合計)		(5 2 2,0 0 0)

■指定文化財管理補助金

(単位：円)

無形文化財	赤倉神楽	3 0,0 0 0
無形文化財	大の坂	3 0,0 0 0
無形文化財	新保広大寺節	3 0,0 0 0
無形文化財	新水のドウラクシン（道楽神）と ハネツケエーシ（羽根返し）	3 0,0 0 0
(合計)		(1 2 0,0 0 0)

編集ノート

文化財課年報5をお届けします。

早いもので、笹山遺跡出土品が国宝に指定されて1年、平成12年度も国宝をテーマにして様々な企画や計画が試みられました。

博物館の国宝指定1周年と銘打った特別展やシンポジウム、火焰型土器No.1の愛称&マスコットキャラクター募集、中条地区振興会主催の「笹山じょうもん市」などです。昨年来市長が諮問していた国宝館・火焰の都計画策定委員会の答申もありました。国宝を活かしたいろんな事業が、これからも続いていくはずです。

国宝や文化財の保存と活用に携わる文化財課の職員として、国宝を活かしたまちづくりに期待するところです。ただ、文化財は現代に生きる私たちだけのものではなく、優れた先人の遺産として後世に伝えていかなければならないもののはずです。まして国宝ともなれば尚更のことでしょう。

この視点からの建設的提言や、ある意味での自制がより重要になってくるのではないのでしょうか。

そして今、ただ単に古い物を残そうとか、郷土の誇りだとか、地域のアイデンティティといった面からだけでなく、環境保全とか、心の安らぎや快適な暮らしと文化財をテーマにした、保存・伝承・活用などの文化財行政のあり方を、より真剣に論議して行かなければならない時期に来ているのではないかと強く感じています。

ともあれ、ささやかな記録ではありますが、是非ご一読いただき、ご指導やご鞭撻をいただきたくお願い申し上げます。

また、文化財課の事業や活動においては、関係機関・団体をはじめ指定文化財の管理者の皆さん、発掘調査作業員の皆さん、関係業者の皆さん等大勢の方々のご支援・ご協力をいただいています。ここに紙面を借りて、厚くお礼申し上げます。

(竹内)

文化財課・博物館職員（平成12年度）

文化財課長	山田 正毅（兼）	
課長補佐	阿部 恭平	文化財係長（文化財主事）
主査	高橋 アキ（兼）	
同	竹内 俊道（兼）	文化財主事
主任	村竹 修	
同	石原 正敏	文化財主事
同	菅沼 亘	文化財主事
同	太田 喜重	
主事	岩田恵美子（兼）	
臨時職員	山田 敏枝	
同	上野 洋子	
嘱託	中澤 幸男（博物館）	
補助職員	山口真佐子（博物館）	
調査補助員	根津 恵	宮内 信雄



十日町市教育委員会 文化財課年報 5

発行日／平成13年(2001) 3月31日

編集・発行／十日町市教育委員会

文化財課

〒948-0072 新潟県十日町市西本町1丁目

十日町市博物館内

十日町市教育委員会文化財課

TEL (0257) 57-5531

FAX (0257) 57-6998

印刷／(株)田口印刷所